

マインドマップを用いた作文指導

—蘇州日本人学校中学3年生クラスでの実践事例—

梶 村 知 美

1. はじめに

国語の時間の「作文」の指導は、原稿用紙を配り、課題を与えて書かせることが多い。そのため、原稿用紙を配るだけで、拒否反応を示す子どもがいる。さらに、「書くことがない」とほとんど白紙状態のまま時間だけが過ぎる子どももいる。そこで、マインドマップ (mind map) を活用して作文指導を試みた。テーマを中心概念として、そこから連想されることを書き出していく方法である。マインドマップはこれまでにアメリカやイギリスにおいてビジネスや教育やカウンセリングの場で発想法やノートテイキング、自由連想法などに活用されている。最近では、フィンランドメソッドの中に用いられている例が報告されている。

また、400字詰め原稿用紙を見るだけで嫌悪感を示す子供が多いことから、200字程度のA4版の原稿用紙を用いることにした。中西(1995)は「二百文字数制限作文はその短さの故に、一段落では一つのことを、という文章表現の鉄則をいやおうなく習得させてくれる」としている。同じ内容をだらだら書くのに比べ、要点を的確に書く力もつくと考えられる。

蘇州日本人学校をはじめ海外の日本人学校が使用している光村図書出版の平成18年度用中学校国語教科書においては、中学1年生の教科書にマインドマップが紹介されている。国語教育においてもマインドマップは注目されている。自分の気持ちを単語レベルで書き出すことで、考えの広がりを絵画や図のように同時処理できるのではないかと思い、マインドマップを活用することにした。アイデアや構想を同時処理して、文字列に書いていく作業としての継次処理を行うことで、まとまりのある文章を書けるようになるのではないかと考える。

2. マインドマップの言語教育における位置づけ

2-1 言語学習ストラテジーとしてのマインドマップの活用

Oxford(1990=1994)は言語学習ストラテジーの中に位置づけられている記憶ストラテジーの一手段として、紙に中心概念とその関連語を配置して作られる「意味地図」の活用を提示している。つまり、語と視覚の結合が記憶ストラテジーに貢献するとの考えによる。さらに、Oxfordは語と視覚の結合は言語学習で次の四つの理由から非常に役立つとしている。

表1 意味地図の活用

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ①脳貯蔵能力は視覚情報に関するほうが言語素材に関するより大きい。 ②情報は視覚イメージを使うことによって長期記憶が可能である。 ③視覚イメージは言語素材を想起するのを助けるもっとも強力な手段である。 ④大多数の学習者が視覚学習のほうを好む。 |
|---|

従って、意味地図を使うというストラテジーは「グループに分ける」「イメージを使う」「連想する/十分に練る」といった他の記憶ストラテジーとも関わりをもつことが分かる。

意味地図の例として Oxford(1990=1994)は Hague(1987:222)の「闘牛」を中心概念に取り上げた意味地図を紹介している。確かに意味地図は効果的な記憶ストラテジーの一つであると考えられる。さらに Oxford(1990=1994)は、「この意味地図は言語学習において、聴解練習や読解練習、効果的なノートテイキング(note taking:ノートの取り方)にも活用できる」として

いる。
石田(2000)は「Oxford が使用した『意味地図』という用語は、記憶ストラテジーという一方向の観点でしか捉えていないため、適切な用語ではない」としている。実際、この「意味地図」自体、用法に従って、様々な名称が用いられている。ここではこの問題を体系化し、整理しようと試みた Wycoff(1991=1994)に従って、「マインドマップ(思考の地図作り: mind map)」としたい。この「思考の地図作り」という言葉から、マインドマップを用いて学習者が創造的に言語学習を発展させていく可能性を表現していると言えよう。

2-2 マインドマップ活用の有効性

Wycoff(1991=1994)はマインドマップは「クリエイティブで斬新な思考を促すためのテクニックである。(中略)脳全体を刺激し、短時間で計画や企画をまとめさせ、想像力を高め、文章を書く際の障害を除去し、ブレインストーミングの効果的な仕組みとなる」と説明している。では、まず、マインドマップとは一体どのようなものか、Wycoff がまとめたマインドマップの作成方法を次の表2に示す。

表2 マインドマップの作成方法

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ①問題や情報の中心概念を表すイメージや絵、または図形を紙の中央に書く。 ②アイデアには批評を加えず、思いつくまま自由に出す。 ③アイデアを表現するのにキーワードを用いる。 ④キーワードは一行につき一つだけ書く。 ⑤キーワードで表現したアイデアは中心概念と線で結ぶ。 ⑥アイデアを目立たせたり、強調したりするために色を用いる。 ⑦アイデアを目立たせるのにイメージや絵やシンボルを用いる。 <p>(頭脳が刺激され、新しい関連付けが容易になる)</p> |
|---|

[邦訳 吉田八重 1994年を使用]

表2から、日本語学習に関連する様々な要素が見出される。まずは、先に述べた言語学習ストラテジーとの関連である。表2を見ると、③はキーワードの使用、⑤はある情報と別の情報との関連づけ、⑥と⑦はイメージを使う、グループ分けなどの意味を持っており、Oxford(1990=1994)が記憶のストラテジーの手段としてあげているものと一致する。したがって現在、言語学習ストラテジーの研究が広まり、ストラテジー訓練の可能性やその必要性が問われる中、

(3)

マインドマップの活用法にもっと目を向ける必要があるだろう。

T. Buzan(1996=2002)は、「マインドマップを使えば、うんざりするほど長い情報のリストが、非常に系統化されたカラフルかつ印象的な図に変身する」としている。作文を書く際、まず何を書きたいのかマインドマップに表すことにより、長い文章が書けるようになるのではないだろうか。マインドマップの利点を T. Buzan(1996=2002)は以下表3のように示している。

表3 マインドマップの利点

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">①大きなテーマや分野の全体像が見える。②目標に近づくためのルートを考えたり、選択肢を選んだりすることができ、自分が向かおうとしている場所や、今までいた場所がわかる。③膨大なデータを一ヶ所に集めることができる。④新しい創造的経路がわかるので、問題を解決する意欲が湧いてくる。⑤ノートを見たり、読んだり、熟考したり、記憶したりすることが楽しくなる。 |
|--|

[邦訳 田中孝顕]

作文を書くのが苦手な子供は、原稿用紙を眺めても全体像がまったく見えてこないということが考えられる。表3をみると、①の全体像が見えることにより、②の自分が向かおうとしている(書きたいこと)が分かるのではないだろうか。

石田(2000)は「マインドマップを利用することは、ほんの数分だけで、頭の中を整理したり、新しい発想や着想を引き出すのに役立つであろう。アイデアの分析は後回しにして、出てきたアイデアを別の新しいアイデアを連想するキーとして使えば効率がよい。また、アイデアに行き詰まり、新しい発想が促せない時も、色や絵を用いれば別の視点への方向転換ができるかもしれない」としている。

T. Buzan(2001=2003)は「書くための平均語彙数は900~1000語、話すための平均語彙数は1000~1100語、認識するための平均語彙数は5000語である」としている。T. Buzan(2001=2003)の指摘は英語の例であるが、日本語においても書くための使用語彙より話すための使用語彙が多く、理解語彙がさらに多いという関係にあることは同様であろう。さらにT. Buzan(2001=2003)は「語彙力がつければ、物事の違いをより細かいところまで、正確に、分かりやすく伝えられるようになる」としている。話すことが苦手な生徒は書くこともさらに苦手という場合が多い。まず、マインドマップに語彙レベルで書き込み、さらに、クラス内でペアワーク(pair work)としてお互いにマインドマップを見せ合うと互いの語彙数は増える。他者と話す活動を通して、アイデアを連想することになり、書くことの刺激につながっていくのではないだろうか。

3. 蘇州日本人学校について

蘇州日本人学校は2005年に蘇州日本人補習授業校から、日本人学校に昇格した開校3年目の学校である。同校は、蘇州日商倶楽部が設置した中国政府の認可を得た私立学校で、2006年度

は文部科学省派遣の教員9名と現地採用教員6名が教育に当たっている。

蘇州市は上海から電車で一時間ほどの長江デルタ地域に位置し、日系企業の参入が盛んなところである。JETRO(日本貿易振興機構)によると、2005年3月に蘇州にある日系企業数は429社となっている。また蘇州近郊の無錫市にも200社あまりの日系企業がある。無錫市にも日本語補習授業校が2006年4月に開校された。

また、蘇州日本人学校は、中国の日本人学校の中でも児童生徒数の増加が著しい学校である。2005年4月には63名だった児童生徒数も、開校初年度の2学期には100名を越え、2007年4月現在では225名の児童生徒が在籍している。4倍近い児童生徒数の増加である。

4. 実施方法と参加者のプロフィール

蘇州日本人学校(以下S校)の中学3年生7人に対して、国語の時間に作文指導を行なった。45分の授業時間の中で30分ほど作文の時間を取った。はじめの5分でマインドマップ(以下、マップと略)を書かせ、お互いに見せ合って、話し合いの活動をした上で作文を書かせた。

実施日：2006年 11月23日 「私の海外生活」

2007年 1月9日 「今年やりたいこと」

次の表4に、参加者のプロフィールを示す。過去に海外経験のある生徒や、現地校、インターナショナルスクールに通学経験のある者、はじめての転校が蘇州だった生徒など、背景は様々である。

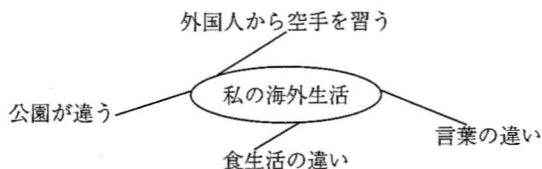
表4 参加者のプロフィール

参加者	滞在期間 (中国地域)	海外での経験等、就学の背景
中3A	2005.4～ 2007.3	幼児期にアフリカで過す。一旦帰国後、中学2年の4月に中国のS校に編入学。
中3B	2003.9～ 2007.3	小学6年の9月から中学2年の8月までインターナショナルスクールに通学経験あり。中学2年9月からS校に編入学。
中3C	2004.9～ 2007.3	幼児期にタイで過す。一旦帰国後、中学1年の1月に中国の上海日本人学校に入る。中学2年の9月からS校に編入学。
中3D	2002.10～ 2007.3	小学5年の時台湾の高雄日本人学校に入り、その後台北日本人学校に編入学。中学2年の9月にS校に編入学。
中3E	2005.4～	直接日本の中学校から中学2年の9月に編入学。
中3F	2004.9～ 2007.3	幼児期にアメリカで過ごす。一旦帰国後、小学6年生の中国の現地校通学経験あり。中学2年の2月末にS校に編入学。
中3G	2006.5～	直接日本の中学校から中学3年の5月に編入学。

5. 実施結果

5-1 中3Aの事例

中3Aは幼児期にアフリカで過ごした経験を持つ。中学2年生の4月に蘇州に転校してきた。海外生活は二度目であるが、アフリカで過ごしていた時期はあまりおもしろくなかったためか、蘇州に来た中学2年生の間は情緒不安定であったと聞いている。日本語を読む力は高いが、話すことがやや苦手である。



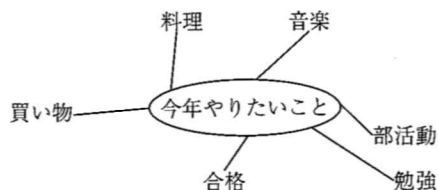
以下に示す作文は原文表記のままである。

「私の海外生活」

今思い返せば、私の周りで起こった国際交流で特に印象的なのは空手だ。先生は英語で動作の説明をする。周りは中国人や白人さんばかり。はじめはとまどうことだらけだったが、日を重ねるごとにそのような環境にも慣れていった。話す言葉は違うけれど、思いやりは世界共通らしい、というのが大きな発見だった。そして、そんな人たちともっと上手に会話ができればと、英語に興味を持てるようになったのも、よい影響だった。

中3Aの居住区に日本食材店や飲食店、またスポーツクラブもあり多くの日本人が居住している。その中に空手教室がある。指導者は中国人である。その教室に中3Aは通っていたようである。中学1年生の時は柔道部に所属しており、「武道がすき」とよく言っている生徒である。外国人と好きな武道を通して接したことにより、英語を勉強する動機づけになったことが分かる。中3Aは言葉は違っても「思いやりは世界共通」ということを、海外生活の中で体験的に理解している。

次に「今年やりたいこと」というテーマのマップと作文を示す。



私は去年一年間、一応受験勉強に専念していたので、あまり自分の時間が持てませんでした。なので、今年は、まず高校に合格したいです。そしたら、料理などを中心とした家事ができるように、家の手伝いを頑張りたいです。そして、高校に上がったら、部活動を充実させながらも、勉強をしっかりとやりたいです。

とにかく、高校生活を存分に楽しむことが私の目標です。

このマップを書かせた頃はちょうど受験まであと2週間という時期であった。冬休みに受験校の見学にも行っており、高校生活のイメージがより具体化されていたのではないと思われる。クラスで中3Aだけ塾通いをしていない。そのため、受験に対する不安もあった時期である。マップには音楽や料理が書き込まれていたが、作文には音楽のことは含まれていない。マップに書かれたアイデアをすべて作文に反映する必要はないが、表3に示したように新しい創造的経路が分かるために、合格、料理、部活、勉強と多岐に渡る意欲的な態度が湧いてくるのではないだろうか。

文中に「なので」といった、接続詞としてはまだ認知されていない接続表現が用いられている。北原(2004)の指摘する『問題な日本語』の一つである。

5-2 中3Bの事例

中3Bは書くことに対するの苦手意識が強い。これまで何度か作文を書かせたり、感想文を書かせようとしたが、ほとんど文章が書けないため提出できなかった。また、なかなか自分の意見をまとめて話すこともできない生徒である。7月に教科書教材で「個人のテーマにそった新聞作り」という単元を実施したとき、内容にこだわりすぎる傾向があり、結局提出できなかった。自閉的な傾向があるように思われると学級担任からも聞いている。そこで、マップで書きたいことを整理してから、文章を書かせることにした。



四年前に初めて海外に行くこと知らされた。その時は海外に身を置いておけば、自然に現地の言葉が身につく物だと物っていた。

しかし、現実はそうではなく、なかなか英語も中国語も身につかず、クラスメイトともコミュニケーションをとれず最悪の日々でした。

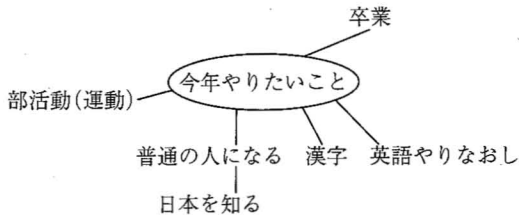
今は日本人学校に転校しけっこう楽しい日々をおくっているが、インターの時、もっと接きよく的にすればよかったとくやんでいる。

注) SSIS (Suzhou Singapore International School の略)、インター(インターナショナルスクールの略)

小学校6年の9月から中学2年の8月までの2年間、同じ市内にある、シンガポール系のインターナショナルスクールに通っていた。この期間、補習授業校などで週に数回日本の教育を受けていたが、ほとんど日本語で作文を書くことはなかったようだ。マップを用いることにより、中3に入ってから一回も作文を提出することがなかった中3Bが授業時間内に書き上げ、提出できた。マップに書かれたキーワードは、他の生徒に比べ少ないが考えさせてから、作文することは有効なのではないかと考えられる。

ただ、書くことはできたが、誤字脱字がとても目立つ。三行目の「ものだと思っていた」とするところが「物っていた」となっている。また、現実の現の字が分からず鉛筆で消していることから、分からない漢字を調べようともしていない姿勢が窺える。さらに「積極的」が「接きよ的」となっている。自分で書いた文章を読み返せば誤字脱字に気がつくはずだが、それも怠っている。4文中第3の文だけが敬体で、その他は常体となっており、文体の統一ができていない。このように表記と文体の面で問題はあがるが、テーマに添った内容で作文を提出できたことは、本人にとっては画期的なことであった。誤字脱字はあるものの、内容においては海外子女の心理状態、実体験をよくまとめて書いている。

次に「今年やりたいこと」というテーマのマップと作文を示す。



今年やりたいこと

僕は、高校に入学したら、二つのことをしていきたい。一つは勉強。帰国子女で入る僕は、一般で入る人よりも学力がだいぶ劣っていると思うので追いつけるようにしたい。

二つ目は部活。中学生になってから本格的に運動したことがなかったのでしてみたい。

僕は、やりたいと思っても実行することが少なく、やり始めても三日坊主なので、この二つは続けていきたいと思う。

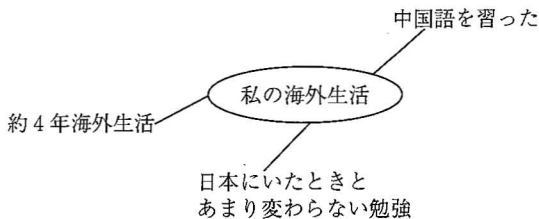
2回目に実施したときは、誤字脱字がなくなり、文章の構成も明確になっている。この時期、中3Bは第一志望の高校への入学も決まり、とてもやる気があった。漢字の問題集も日本から買ってきていて、分からない漢字は辞書で調べている。海外生活が3年半とあって、日本の中学生の文化が分からないことを気にしていた。さらに、国語以外の他教科においても提出物を

出していないことが多い。本人に自覚はあるが、なかなか行動に移せないため、日本へ帰国した際、適応できるのか心配していた。そのため、マップには「普通の人になる」というキーワードを出しているのではないと思われる。マップに書かれたアイデアはそのまま作文に使用されているわけではないが、考えをマップ上で同時処理することを通して、文章表現という継次処理にスムーズに移行できたのではないかと考える。

前掲の「私の海外生活」と「今年やりたいこと」を比べると、マップに書き込まれた語数も3語から6語と多くなり、一ヵ月半ほどの間に大きく書くことに対しての姿勢が成長し、内容もマイナス要素が多い「私の海外生活」に比べ、前向きな姿勢で取り組みたいという気持ちが出てきはじめています。

5-3 中3Cの事例

中3Cは海外生活二度目の生徒である。幼児期にタイでの生活経験を持つ。中学1年の3学期から上海日本人学校に通い、中学2年生の9月にS校に編入してきた。国語力は全般的に高く、自分の意見もしっかり持っている生徒である。



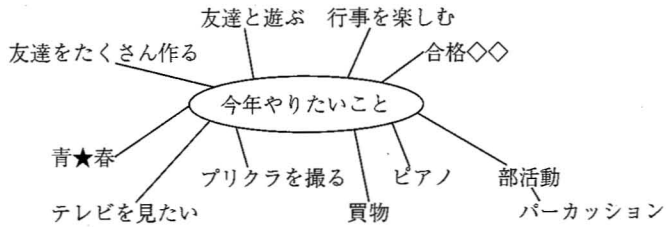
私は中学校生活の2年間を海外で過ごし、あらためて言葉・語学の大切さに気付かされました。日本に居た時私は、どの国の人も同じ言葉を話せば楽なのに…とっていました。しかし、中国で生活し日本語や英語、中国語などの表現の違いや、発音や四声が変わるだけで言葉の意味が変わってしまう中国語のおもしろさや難しさなどを知り、その国の言葉の重要性がよく分りました。

将来はこの経験を生かせればと思っています。

中3Cは、英語以外の言語に出合ったことにより言葉の大切さやおもしろさに気がついたようである。日本で進学した高校も語学を多く選択できるコースを選んでいる。日本にいる中学生に比べ、なぜ外国語を学ぶ必要があるのかを実生活を通して、考えているようである。キーワードに「日本にいたときとあまり変わらない勉強」と挙げているように、海外への転校は勉強についていけるのか心配な面もある。日本人学校は日本の文部科学省の教育方針のもとに授業が進められる学校である。中3Cが想像していた海外での学校生活に比べ、日本に近い教育を提供していると言える。

次に「今年やりたいこと」というテーマのマップと作文を示す。

(9)



今年の目標は、志望校に合格し、充実した高校生活を送ることです。

その高校生活で特にやりたいことは、吹奏楽の部活動です。中学校三年間出来なかったため、最初はレベルに付いていけないと思うが、中学校生活で味わえなかった部活動の楽しさ、辛さ、厳さを体験したいです。

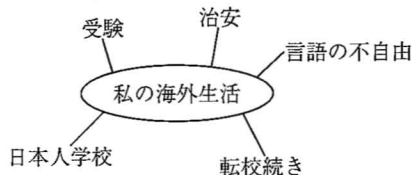
去年は、日本ではなかなか出来ない貴重な体験をしてきたので、今年は、日本じゃなければ出来ない高校生活を思う在分楽しみたいと思います。

中3Cは、今年やりたいことを最も多くマップ上に11項目書き出している。それだけ、蘇州ではできないことが多かったのかもしれない。日本国内では部活を三年間続ける中で辞めなくなる時期もあるだろう。中3Cの場合、中学一年の一月からの転校で、メンバーとして充実した時期を過ごせなかったことが残念だったようだ。「テレビを見たい」といった衝動は、受験生だからテレビを制限されているというよりは、中国にいて、日本に比べ見られない番組が多いためだと考えられる。プリクラを撮る、友達と遊ぶといった日常的なことが、中国の生活では自由にできないことが分かる。また合格や青春には星印などを付けていることから、表2に示したようにマップ上のキーワードを目立たせるための工夫をしている。

しかし高校生活は日本で送ると決めているため中国での生活を「貴重な体験」と書いている。中国生活に適應している時期だと考えられる。

5-4 中3Dの事例

中3Dは5年生の時から海外生活を送っている。日本では転校経験がなく、海外に来てから短期間で転校ということが続いている。台北日本人学校は一学年100名程度在籍していたようで、はじめのうちは小規模のS校に馴染めなかったようである。中学3年の時は生徒会長をやっており、学校行事に積極的に取り組む姿が見られた。



海外に来て

海外に来て四年経つが、初めて海外に降り立った時のことは今でもよく覚えている。

周りは聞いたことのない言葉ばかり、見たこともないものばかりで、好奇心に満ちあふれていた。

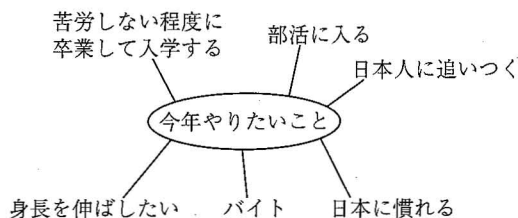
しかし、初めての転校でもあったため、その不安は消えずにいたが、日本人学校にもすぐに慣れた。その後転校にも慣れ、落ちついたところで日本にいれば経験することのなかった海外からの受験。

後に幸と出るか不幸と出るかは分からないが、今自分の運命にただ感謝している。

この作文を書いたのは、ちょうど第一志望校の受験まであと1週間という時期だった。海外から日本の高校に受験する、また新設校であるため第一期卒業生となるので、進路に対しても不安が大きかったと思われる。小学校5年生の時に台湾に渡ってから、蘇州は転校3校目であったため、転校ということがつらい時期もあったと考えられる。最後に中国語表記で「感謝」という言葉を使っているところからも、海外への転校を肯定的に受け止めている時期と言えよう。

「治安」のことは作文には記述していないが、反日運動があった年に中国におり、さらに不自由な生活を余儀なくさせられていたものだと推察される。

次に「今年やりたいこと」というテーマのマップと作文を示す。



帰国後の生活目標

高校に入って心配なことは、日本の生活について行けるかどうかだ。海外で四年過ごし、中学校三年間を全て外国で送ったため、日本人の生活を今私は全く知らない。

高校に入学したら友達との付き合い等でいろいろと出歩く機会が増えるだろう。一刻も早く日本の生活に慣れて日本人らしい高校生活を送りたいと思う。もちろん勉強もしっかりやりたいが…。

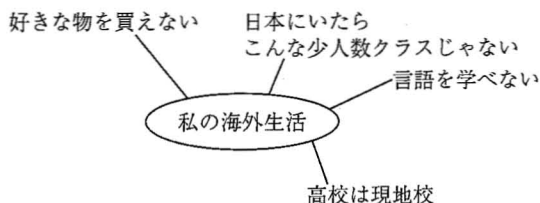
これが私の今年の目標(希望)である。

年内に受験が終わった中3 Dは、四月からはじめる日本での高校生活にとっても不安と希望を抱いていることが分かる。海外子女が多い大学付属の難関校に合学したため、学習面でもついていけるかどうか気にしていた。キーワードとして書き出した「日本人に追いつく」「日本に

慣れる」は、あたかも外国人が書いたような印象を受ける。それは、数年海外で生活すると自分自身が生粋の日本人ではないような感覚に陥ってしまうためかもしれない。男子であるためか、女子と比べて中3 BとDは日本の友達とのつながりをあまり持っていない。そのため、中3 Bも「日本を知る」ということをキーワードにあげている。生活習慣の違いから日本文化に遅れてしまったような気持ちになり、日本の生活に適應する自信がなくなってきているのだろうか。中学3年生のクラスは、男子が2名だけで一年半を過ごしている。友人関係の面でも不安が大きいようだ。

5-5 中3 Eの事例

中3 Eは日本から直接入学してきた生徒である。日本での転校経験はなく、S校が初めてである。S校開校当初からの生徒である。高校は中国の現地校に進学すると決めており、中学2年の時から中国語や英語といった外国語の学習に力を入れている。



私の海外生活

やはり日本で生活するのと海外で生活するのでは、全く環境が異なっていることだと分かった。例えば日本にいたら、少人数クラスはどういうものなのかを味わうことができない。実際、良くも悪くもないものだが、勉強を頑張りたい人にはいい環境なのだと思う。それから、ここにいなければ当然留学する以外は言語を学べないはずだったと思うし、その上家族でこれに恵まれているなどと思った。きついかもしれないが、新しい学校でいろいろな事を学びたい。

中3 Eは現地校に進学したため、週3回3時間の中国語のレッスンを受けていた。7人しかないクラスであったが、テストの平均点などを気にしていた。11月は日本への受験組が受験モードに入った時期であったため、S校での授業に不安があったものと思われる。中3 Eの家族は家族で暮らすことを大切にしており、父親の単身赴任や中3 Eが高校を日本で過ごすという選択肢もあったが、現地校進学を選んだようだ。英語以外の外国語である中国語を早い時期に学べたことは良かったと感じている。

ただ、上海以上に蘇州は物が手に入りやすく「好きなものを買えない」という欲求不満な気持ちが見られるのが分かる。

次に「今年やりたいこと」というテーマのマップと作文を示す。

(12)

中国語をマスター!!

おべんきょができるように…

今年やりたいこと

おばあちゃん、いとこ、親せきの人たちに遊びに来てほしい

今年頑張りたいこと

今年頑張りたいと思ったことは、まず高校に入って必要とされる中国語です。中国語を覚えないことには授業にもついていけないし、友達と話すことさえできません、ですから、今の私に必要だと思えます。そして、いつか祖父母や親せきの人達が来たときには中国の文化を伝え、案内できる程になっていると嬉しいです。

去年できなかった勉強の復習をし、しっかり身につけていきたいと思えます。

中3Eはキーワード3つの中で二つが学習面のことである。2ヵ月後には現地校に入学するという時期だったので、中国語に対する不安が大きいことがよくわかる。冬休みに日本に一時帰国しており、この時期「もし、現地校に入ってきつかったら、もう辞めて日本に帰ろうかなあ」と話しており、現地校に対する不安が大きい時期であった。おそらく冬休み日本に帰国して、同級生と接することにより不安が増大したものと思われる。しかし、中国語を習得して友達を作り、中国のことをもっと知りたいという前向きな気持ちを書いていることから、中国語をマスターしたいという強い決心を抱いていることが窺える。

5-6 中3Fの事例

アメリカで幼少期を過ごしている。小学校6年生の9月から2年半蘇州市内の現地校に通っている。そのため、中国語、英語ともに読み書きが堪能である。また努力家であり、国語、理科、社会など現地校で履修していなかった教科についても、能力が高い。自分の意見をきちんと述べる生徒である。

中国人とオーストラリアへTravel

現地校

私の海外生活

貧富の差

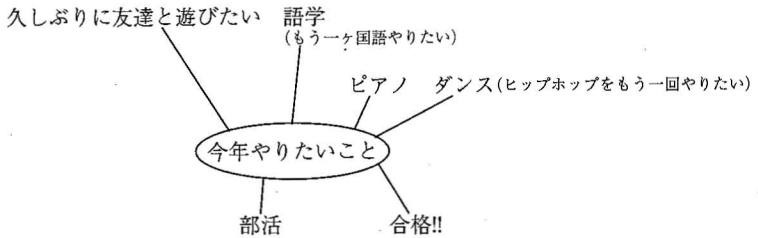
私の海外生活

海外生活と聞いて思い浮かんだのは、中国人とオーストラリアへ行った事だ。ホームステイ先の人とは英語、友達とは中国語でコミュニケーションをとった。すごく恵まれていたと思うし、ちょっとした世界一周旅行をした気分だった。

肌の色が違っても、母国語が違っても、仲良くなれる事を身をもって体験できた。世界中に友達の輪を広げて、いろんな考え方ができる人になりたい。そんな夢を抱く事ができた海外生活だった。

中3 Fは現地校でさまざまな国の人と接している。特にオーストラリアでのホームステイは日本語をまったく使わず、英語と中国語の中で生活したようだ。S校に編入学した後、行事がたくさんあって楽しいなど、編入して良かった、現地校では勉強がとてつきつかったということをよく話していた。行事が少ない現地校での楽しい思い出の一つであろう。

次に「今年やりたいこと」というテーマのマップと作文を示す。



今年やりたい事

やりたい事なんてたくさんある。部活、趣味、語学…数えきれないけれど、全ては高校に入学しないと始まらない。

私は高校受験すると決めたのも志望校を決めたのも遅く、他の人より何倍も頑張らないといけない。

第一志望はレベルがものすごく高く、偏差値も追いついていないので残りわずかな時間を上手く使って勉強して、試験に望みたい。

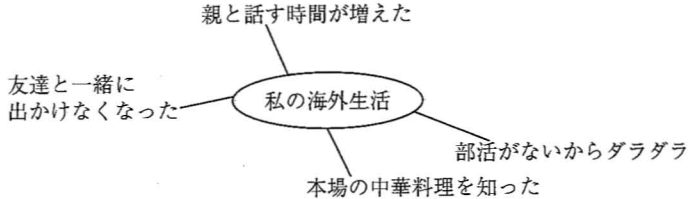
それで、全員が笑顔で卒業できたらいいな。

中3 Fの今年やりたいことは、まず高校に合格することであろう。中3になる春から日本の勉強を始めた中3 Fはこの一年間、とても努力をしていた。一人っ子であるが家では集中できないと、夕方から塾に弁当持参で遅くまで勉強していたようである。5月頃までは漢字を中国の簡体字を書いてしまうという間違いをしていたが、日本の勉強量が増えたことで、ほとんど間違いをしなくなった。

やりたいことを抑えて、この時期受験勉強に専念していたことが分かる。

5-7 中3Gの事例

中3Gは中学3年の5月末に編入してきた。初めての転校が海外であった。編入1週間後、修学旅行があったがこの期間にはクラスメイトとも馴染んでいたように思われる。中学3年での転校ということで不安が大きかったようだが、クラスのムードメーカーだと級友から思われている。



海外生活をして

私が海外で生活して日本と変わったことはまず、部活がなくなったのでダラダラしてしまうことです。けれど家にいる時間が増えたので親と話すことが増えました。おもしろい話、下級生の話など今までこれは話さないだろうというジャンルまで話すようになりました。また、親がその話に対しての感想などを聞くようになり、ああ、そこはそうすべきかといろいろと考え方が増えました。これからも親と話せればいいです。

S校は部活は週2回1時間程度しかない。そのため、日本の中学校から編入した生徒は夕方の時間や休日の時間を持て余すようである。中学生であっても子供同士での外出を禁止されているので、「友達と一緒に出かけなくなった」というのも、海外子女の特徴の一つと言えるかもしれない。マップには「親と話すことが増えた」ことは書いていないが、作文から今まで部活や交友関係に使っていた時間を親と過ごしていることが分かる。「またこれは話さないだろうというジャンルまで話すようになった」とあり、友達との会話が減った分、親と会話する時間が格段に増えていることが分かる。これまで同年代とのつながりが強かった中3Gにとって、親との関わりの中で学ぶことも多いようである。

また「本場の中華料理を知った」ことについては、作文では触れていない。

次に「今年やりたいこと」というテーマのマップと作文を示す。



絶対、したいこと

私が今年したいことは大きく分けて二つあります。一つは、高校生活を楽しむことです。現地校では中国語、英語を使つての授業なのでとてもつらいと思いますが、中国人の友達などをつくって楽しみたいと思います。

もう一つは、日本に帰ることです。今回は短期間だったので、次は長期間でルーズに過したいです。また、日本に帰ると友達や日本にいる友達とどこかに出かけたいです。

中3 Gは中学3年の5月末に編入したため、一年足らずで中国語と英語を身につけ、中国の現地校に進学しなければならなかった。しかし中国人の友達を作りたいという前向きな姿勢が窺える。冬休みに一時帰国したが、一時帰国の間に友達に会ったり、遊びに行ったり、買い物したりと休む間もなく限られた日本での時間を使っていたようである。中3 Gは千葉県から来ており、東京ディズニーランドが大好きである。中3の女子は全員関東圏にいるため、夏休みにディズニーランドでみんなと再会したいという希望を持っている。

6. 考察

今回マップを用いた作文指導を実践しようと思った背景には、ただ課題を与えて作文を書かせるこれまでのやり方に疑問を抱いていたことがある。特に中3 Bは2学期末の定期試験に作文課題を出していたが、その部分は白紙で出してきた。試験においても書こうという姿勢が見られなかった。作文が書けない子どものアドバイスとして、さらに樋口(2006)は「子どもの口から出てきたキーワードを元に考えをまとめるヒントをあげるとよい」としている。一斉指導の中で作文指導をする際、一人一人に訊きながら机間指導することは大変である。40人学級の場合、一人1分程度しか教師と対話する時間がないということになる。そこで全員にマップを用いて、自分で課題からキーワードを挙げる、ペアワークやグループ学習など子供同士の話し合いの時間を設けることで、スムーズに書く作業に入れるのではないかと考えた。

実際、これまで作文が書けなかった中3 Bが、他の生徒と同じ時間内に作文を書いて提出できたことからマップを用いてキーワードをまず書かせた上で作文指導をすることは、書けない生徒にとっては同時処理を経て、書くという継次処理の作業に入る方法は有効な一手段であると考える。

「私の海外生活」の方では、中3 D「治安」、中3 E「好きな物を買えない」といったマイナスイメージが多い。マップに書き出した項目数を比べてみても、「私の海外生活」の方では、平均3.71項目であるのに対し、「今年やりたいこと」は5.85項目挙げられている。特に中3 Cは「今年やりたいこと」を11項目も書いている。

T. Buzan(1993)は、マップを用いると「自分の内深くに潜んでいた本音や心の底の願いが浮かび上がってきて、完璧な自己分析を行うことができる」としている。「私の海外生活」はこれまでの海外で生活をしてきた自分を振り返ることである。「今年やりたいこと」は、これからこの一年の自分の目標や希望を書く作業である。「今年やりたいこと」の方が多くキーワードを挙げていることから、マップに慣れたあるいは書きやすいテーマであったということが考

えられる。「今年やりたいこと」を多く書き出しているのは、高校生活を日本で送る子どもたちである。中国の現地校に進学する中3 Eは3項目、中3 Gは4項目ほどしか挙げていない。その項目の中身も「遊びに来てほしい」、「日本に帰りたい」といった内容で、やや消極的な印象を受ける。

中3 Eは「私の海外生活」の作文で「家族でこれて恵まれている」と書いている。子どもの作文を見ると、海外での生活を否定的に書いている子どもはいない。大人に比べて子どもは異文化にすぐ慣れると言われる。その理由として塚本(1992)は「子どもたちは単身で異文化環境にはいるおとなや留学生とちがい、つねに家族と共に異文化に入る」ことをあげている。中学生に進学してから中国に来ることになった中3 A・中3 C・中3 E・中3 Gも日本では経験できなかったことが経験できたと感じているようである。塚本(1992)は「異文化での生活をはじめ際には、そこで生活することを家族の一人一人が納得した上で、現実を肯定する姿勢(「移って来てよかったね」といった姿勢)と、前向きな生活態度(積極的な生活態度)が不可欠となる」としている。

また、中3 Gは先に書いた「私の海外生活」では段落を設けないまま書いていたが、返却時に段落を設けて書くことという注意書きをしていた、そのため、「今年やりたいこと」では二段落構成で書いたのではないかと思われる。

筆者は作文指導の際、一人で考え込むのではなく、マップにしたり、友達とのグループ活動を通して、作文を書くことを勧めている。マップにしたことで、書いた後も友達同士で読み合うシェアリング(sharing 分かち合い)を自然に行っていた。書き出したキーワードからどんなことを作文に盛り込んだか、お互いに興味と関心を持っていたようだ。誤字脱字や段落構成といった技術的な面での指導も大切であるが、多くの人の考えや書き方を知ることで、より内容に深まりが出てくるのではないかと思われる。

7. 今後の課題

同じ課題を与えて、マップを使用する前と後で実施すれば、マップの利点が見られたかもしれない。また、マップを描く時間を増やし、語彙の拡大、絵をマップに描き入れることを通して、思考する時間を与えてやることにより、マップ上のキーワードをさらに引き出せていけるだろう。

今回は200字作文にとどまったが、字数を制限せずに書かせると、もっと具体的な内容の作文となるだろう。

海外に転校してきた当初、たいいていの子どもは不安な気持ちでいる。海外生活の中で自分は何をやりたいのか、マップに書かせることにより気持ちを整理させることで、不安を和らげることができるかもしれない。また、自分の意志で日本に来日した留学生や社会人にも応用できるのではないだろうか。

謝辞

本論文は、山口大学人文学部国語国文学会(2007年5月13日)で発表したものに加筆・修正を加えたものである。会場では多くの先生方に貴重なご意見を頂戴致しました。この紙面を借り

て謝意を表します。

【参考文献】

- 中西一弘(1995)「200字作文で文章力をつけるコツ」『教育科学 国語教育』7月号 明治図書 p13
- Tony Buzan (1996) 『HOW TO MIND MAP』『どんどん右脳が目覚める！不思議なノート法』(2002)騎虎書房 p14邦訳 田中孝顕
- Tony Buzan(2001)『HEAD FIRST』『自分を天才だと思える本』(2003)きこ書房 p264 邦訳田中孝顕
- 石田孝子(2000)「日本語教育におけるマインドマップの活用」『しあわせます山口1』山口県日本語教育ネットワーク
- RebeccaL.Oxford(1990)『LANGUAGE LEARNING STRATEGIES WHAT EVERY TEACHEAR SHOULD KNOW』『言語学習ストラテジー』宍戸通庸・伴紀子訳(1994)凡人社 p60
- Wycoff, J, (1991) Mindmapping,The Berkley Publishing Group.[邦訳：『マインドマッピング』吉田八重(1994)日本教文社]
- 塚本美恵子(1992)「異文化で育つ子ども」『異文化へのストラテジー』川島書店 pp51-pp56
- 樋口裕一(2006)『書く力で子どもを伸ばす』学習研究社 pp104-pp116
- Tony Buzan&Barry Buzan(1993)『THE MIND MAP BOOK』『これが驚異のマインド・マップ放射思考だ！！』(1996)邦訳 田中孝顕 騎虎書房 p183

(すぎむら・ともみ)